

Open up the future 2024.11.20



音色だけじゃない、だからこそ様々な可能性に満ちている

身の回りの音の「音色」に着目し、音楽作品作りに挑戦した矢吹教諭。提案性ある授業であったがゆえに、協議会では様々な授業展開の可能性について議論がなされました。定規の鳴らし方によって音色が変化したことに着目したように、演奏することと作品作りをすることを行き来することはどうか。タブレットを1台ではなく、複数台活用して後で持ち寄る方法はどうか。音の素材を持ち寄って組み合わせるうちに、少しずつ「自分なりの意味や価値」を見だし、「〇〇をテーマにした作品にした」という作品の方向性が定まってくるという見方もできるのではないかと議論されました。音楽作品のフォーマット、例えばリズムの早さを指定することで、より音色に焦点化して議論することもできたのではないかと議論されました。逆に焦点化しなかったからこそ、音色だけでなく反復や変化など様々な気づきに発展していったのではないかと議論されました。…授業中、一貫して矢吹教諭は、自分という「唯一の身体」から生み出される音を大切にされていました。このことを音楽科としてどのように捉えるか、教科提案に盛り込むことでさらに音楽という教科への理解が深まっていきそうです。

真の探究における生活科ならではの見方・考え方とは？～材との出会いと探究の行方～

生活科寺田教諭「ぼくたち・わたしたちのおもちゃけんきゅうしょ」では、子供たちは幼稚園の人に楽しんでもらうために、「おもちゃづくり」に関する自分達の困りごとを解決しようと、おもちゃを作り直していました。ただ、「幼稚園の人に…」という子供たちの思いは指導者の想定とは違って強くはなく、「はみ出さないように走るには…」 「落ちないように貼るには…」など、多くがおもちゃづくりに目を向けていました。生活科における探究の連鎖の中で、「知識・価値・創造物の深化」の一つが「気づきの高まり」であるとするならば、本時において高まったものは何でしょうか。「物事との関わりを「自分ごと」として捉える」見方（概念）とは。「園児との交流」や「おもちゃ作り」は、子供にとって魅力的ではありますが、子供が人や対象と、どのように出会うと「思いや願い」が生まれるのか。そして、その思いや願いを実現する中で、どのような「考え方」を生かしているのか。生活科固有の「身近な生活に関わる



見方・考え方」を生かすことで、探究の連鎖の中で気づきを高め、自分たちの思いや願いを実現し、自立や生活を豊かにすることにつながる生活科の真の探究とは何か。様々な「問い」が生まれ、生活科の教科の本質に迫る協議となりました。